

以上の用例から「溝壑」とは谷間や溝のことであり、「溝壑に填まる」の意は、命を失ふことである。

○179 句目「潘岳非忘宅」の「宅」についての考察

この一句は（『文選卷第十六』志下）「閑居賦」一首の、賢臣であったが不遇な目にあつた潘岳の「賦」を踏まえる。そのなかに次のような内容が記されている。「魯の武公に仕え秀才に推挙されたこともあつた。晋の世祖武皇帝に仕えて河陽県の令・懷県の令となり尚書郎・廷尉平となつた。その後あまり運が無く、官位に恵まれなかつた。二十歳のときから五十の年に至るまで、八度官を移り、一度位階を進められ再度免官となり、一度除名され、一度は官を受けず、官を移されること三度という次第である。運の開けることと開けないことについては定めがあるとはいへ、結局はやはり私の世渡りのつたなさを証明するものである。誠意を貫き仕事に努めても、世渡りのつたなきものは榮達の望みを絶つべきであるとして、洛水（河南省洛陽のあたりを過ぎて黄河に注ぐ川）のほとりに閑居した。かくして、隱逸の人と同じ身となり野の人と成り果ててしまった。母親に孝養を尽くしつつ、池や沼で魚を釣り野菜を売って朝夕の食事をまかなう生活であつた」

以上の内容から「宅」は「故郷」を指すものと思われる。